



▶出力されたパーツが揃ったら再び村尾氏の出番。まずはハンダゴテを使って、寛々しい表皮のディテールを再現していく



◀インダストリアルクレイで歯の原型を製作。これを複製して取り付けた



▶尖ったもののスキヤンは困難なため、歯は自作することにした



◀完成した眼球。表面にはウレタンクリアーをたっぷり塗り、瞳に水沢を加入した



◀眼球はカプセルタイプのカプセルを半分にして使用。瞳はデカールを自作し、さらに血管などを描き加えている



◀続いて両目の加工。まずは目の部分をくりぬいておく



◀完成したゴジラヘッドはご覧のポリウム。発泡スチロールなので非常に軽い！



◀寛々しい皮膚感を表現するため、全体の塗装には骨材入りの壁用塗料を使って仕上げている



ハミルトン株式会社
〒279-0025 千葉県浦安市鉄線通り2-2-8
ホームページ
<http://www.hamilton-ship.co.jp/>
TEL.047-382-8133
(月~金 10:00~17:00)

るが、調べてみると実に種類が豊富で工業製品用の硬い5倍から緩衝用の柔らかい90倍までさまざまであった。切削後の加工性を考え、硬質の発泡スチロール50倍を用いての出力を決めた。写真にあるように切削粉を巻き上げながら稼働してる姿ははげれするもんじゃった。

切削加工が終われば組み組みを行なったものを見ると、映像上の84ゴジラと表皮の表現が変化するのが分かります。面白くない。今回は、あえて映像に近づけるのではなく、原型を再現することに主眼を置いた。

前記したように面については表現できなかった事から、インダストリアルクレイを用いて原型を作り、型取りした複製を使い再現したぞ。

さて表皮の表現じゃが、このままではツルツルとしているので荒々しい表皮を再現する為、ハンダゴテを使う事にした。ただし60Wのハンダゴテを使うとすぐに溶けてしまい表現には向かない事から、コントローラーを使いコテ先の温度を調整した上で溶かしながらの彫刻を行なった。表面を溶かすのじゃが、簡単に溶けてしまつて温度調節をこまめに行かない、ちょうど良い表現状態に出来るよう何度も練習したぞ。今回の製作で気付いたことは、溶けた発泡スチロールは思いのほか硬くなっており表面コーティングを施した様じゃった。目はくり抜いて、カプセルタイプの透明カバーを半割し表面に黒目を書き込み、裏側から血管や白膜を書き込んでウレタンクリアーをたっぷり吹き付け、透明度を再現したぞ。

全身塗装には、骨材入りアクリルエマルジョン系外用塗料を使い寛々しさを出した。これが今回の復活84ゴジラの全貌じゃ！

今まで、取り組んだ事が無かったが、発泡スチロールは加工次第で自由な表現が出来る素晴らしい材料である事を再認識できたぞ。

さて最後に今回製作に協力してくれたハミルトン株式会社さんについて担当の鎌直君に話してもらおう。

鎌直社長を筆頭に「舞浜アート・モデリング・ラボ」というコンセプトで「舞浜から世界へ」とそんな思いを胸にアートの職人が立体造形をしながらチャレンジするハミルトンです。ヤマハの船舶製造技術を元に、各種テーマパークやディスプレイ業界を中心に美術造形を提供しております。今回のような技術で、お客様の思いを立体造形に致します。お気軽にご相談下さい。

<http://www.hamilton-ship.co.jp/>

ありがたう鎌直君、それでは読者諸君これからも、新しい造形方法や、レトロなもの、ギミックなどを用いて模型の楽しさを発信するぞ、楽しみにしてくれたい。